

東京都美術館 ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 480

start

輝くあの人とartの素敵な出発点

Interview

山口智子

YAMAGUCHI Tomoko



数々のヒットドラマで主演を務め、
カリスマ的人気を博してきた
俳優の山口智子さん。

2010年からは世界中の民族音楽を伝える
映像ライブラリー「LISTEN.」を
自らディレクションするなど、活動の幅を
広げています。国内外の美術館・博物館に
足を運んでいる山口さんに、
アートの魅力について伺いました。

Actress YAMAGUCHI Tomoko has starred in numerous hit dramas and won popularity with her charismatic performances. She is currently expanding her activities, and since 2010 has produced "The Listen Project," a video library that shares music from cultures around the world. We asked Yamaguchi, who visits art galleries and museums in Japan and abroad, about art's appeal for her.

美術館には一人で訪れ 心ゆくまでアートと向き合います

東京都美術館の一番の思い出といえば、夫と一緒に拝見した「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」（2023年）です。夫は昔から彼の大ファンで、「エゴン・シーレの作品には偽りが無い。社会への反抗精神を感じる」と言っていました。私も影響されて大好きになり、珍しく一緒に美術館に足を運び、作品を堪能させていただきました。

「珍しく」というのは、普段は美術館には一人で訪れたい人間だからです。同行者に気を遣わずに自分のペースで鑑賞でき、好きな作品の前では心ゆくまでずっとたたずんでいられる。だから夫と訪れた際も、鑑賞は別行動です。「終わったら出口集合!」という感じ(笑)。

ミュージアムショップも楽しみの一つ。展覧会にちなんだ限定グッズは大好き。作家の限定版画を購入したことがありますが、それなりのお値段のモトを取るため(笑)、部屋の中央に飾って毎日眺めています。

展示室から一步外に出ると 目に映る景色すべてがアートに!

私の美術館での作品鑑賞法は、まずは解説をいっさい読まずに、ただただ作品を「感じる」ことに集中します。事前に情報を入れすぎてしまうと、想像力が広がらない気がして、実は影響されやすい性格なので(笑)。頭で考えて答えを決めつけるのではなく、赤ちゃんみたいに生まれたての感覚で作品と向き合い、感じたものを純粋に受け止めたい。その後、興味が湧いたアーティストの伝記や手記を買い集めて、徹底的に調べることもあります。

作品そのものの魅力はもちろんですが、どちらかというと作家の人間としての「人生」に興味

美術館は自分がリセットされる場所
すばらしい作品やものづくりに情熱を傾ける人から
圧倒的なエネルギーをもらいます

In a museum, I can clear my thoughts.
I get enormous energy from people passionate about creating great works and artisanship.



山口 智子(やまぐち・ともこ)

1964年生まれ。1988年NHK連続テレビ小説『純ちゃんの応援歌』で俳優の道へ。ドラマ『ダブル・キッチン』(‘93年)、『29歳のクリスマス』(‘94年)、『ロング・バケーション』(‘96年)、『監察医・朝顔』(2019年、2022年、2025年)、映画『春に散る(2023年)等に出演。2010年から10年をかけて世界を旅し、美しい音楽文化をライブラリーに収めるプロジェクト『LISTEN.』を開始。2022年に出版した同名の書籍ではQRコードから音楽映像を体感できる。2023年、旅を通して文化を伝える業績を讃える「兼高かおる賞」を受賞。日本再発見の旅を映像に収めたYouTubeチャンネル「山口智子の風穴!？」を配信中。



を惹かれます。画家の手記を読んで、葛藤を抱えながら絵筆をとった想いや、世の荒波に翻弄されながら描き続けた道を知ると、強烈に感情移入できます。例えば、西洋絵画の印象派作品が私はどうも苦手でしたが、美術ドキュメンタリーの撮影で現地を訪れ、ゴッホ、ドガ、ロダンの人生を探ったことがきっかけで、人間味あふれる彼らの生き方に深く引き込まれました。北斎や広重など日本の浮世絵に猛烈に憧れ、社会的には不器用な生き方ながらも、懸命に美を追求した彼らの人生に深く共感しました。

美術に触れると、慣れた日常の世界をリセットできます。美術館に入る前と後では、世界の見え方が激変します。最近では宮崎県立美術館で開かれた「テオ・ヤンセン展」は衝撃的でした。なんでもない日用品から、風で動く「生命体」を生み出す彼のアートは、神のみわざのようで、帰り道では出会う物体全てに命が宿っているように見えてきて、世界がキラキラ輝きだしました。

原点回顧で国内の 美術館などを巡る旅へ

私は「もっと世界を知りたい!」という心の声に従い、2010年から10年をかけて世界中を巡り、様々な風土から生まれる音楽文化を映像ライブラリーに収める活動をしてきました。色とりどりの美しさで輝く今の地球の美しさを、偽りのない「音」を通して未来に伝えたいという熱い思いに駆られながら。知らない地を訪れると、美術館や博物館にもよく足を運びます。特に古代文明が大好きなので、ドイツ・ベルリンのペルガモン博物館は鮮明に記憶に残っています。古代都市の巨大な門がそのまま館内に再現されていて、そのスケール感に圧倒されました。古代にタイムスリップしたかのような感覚。地球という星は、こんなにも美しい美術や音楽に溢れていることを、私たちはもっと知って誇って、生きるエネルギーとしていくべきだと思います。

最近は、原点回帰で故郷日本をもっと知りたいと思っています。この前初めて訪問した、新潟の里山や人々の暮らしをアートと結びつけた「大地の芸術祭」は印象的でした。住人にとっては見慣れた景色や暮らしでも、外から訪れる者にとっては、唯一無二の貴重な宝物です。旅人の役割は、外から新たな風を吹き込んで、その土地ならではのかけがえのない素晴らしさを、その地の人々に再発見していただくことかもしれません。

ものづくりをする人への 尊敬の念

謙虚に技を磨き「ものづくり」を追求する職人精神を、私は心から尊敬しています。世に「芸術」という意識がまだ芽生えていない時代、絵画や音楽は人々を楽しませる職人仕事とされてきました。あのレオナルド・ダ・ヴィンチも、町や建築を彩り人々を楽しませるための職人工房に属す「職人」だったのです。職人精神はまさに、人々の幸せを創り出すエンターテインメントです。誰かの幸福に繋がる仕事に誇りを持って、技を磨き邁進する。そんな職人精神を、私も心を持ち続けたいと願います。音楽や美術、暮らしに幸せを運ぶエンターテインメントを、これからも憧れながら追いかけていきたいです。

東京都美術館ではこの夏、DIYをテーマにした「つくるよろこび 生きるためのDIY」が開催されるそうですね。日曜大工や家具製作だけでなく、本来の「do it yourself = 自分でやってみること」と、広く捉え、その可能性を見いだす企画展。「自分で一歩踏み出す」ことは、それなりに体力のいることですが、予想もしないような新たな出会いの始まりでもあります。頭であれこれ思い悩むよりも、まず自分の体を使って感じるセンサーを取り戻すことが大切ですね。楽しみです。

start

My fondest memory of the Tokyo Metropolitan Art Museum is the exhibition "Egon Schiele from the Collection of the Leopold Museum – Young Genius in Vienna 1900" (2023), which I saw with my husband. My husband and I both love his work, so we attended the exhibition together, something unusual for us. It is far more common for me to attend exhibitions alone.

When viewing a work of art at a museum, I don't read the commentary at first but rather experience it purely, with my entire being. I afterwards read explanations and relevant books to confirm the aspects that interested me. The work itself is fascinating, needless to say, but I am more interested in the painter's life. There is something deeply moving about knowing the thoughts and circumstances behind a painting the artist created while struggling with inner conflict.

I have long deeply respected people who are filled with a passion to create. I believe that things produced with a pure desire to move and entertain viewers has a brilliance that does not lie. I have boundless respect for how the artist's sincere labor engenders marvelous skills and gives happiness to others.

I hear the Tokyo Metropolitan Art Museum will hold a thematic exhibition on the subject of "do-it-yourself" (DIY) this summer. The exhibition will not simply deal with being a weekend carpenter and making furniture but rather look broadly into the real meaning of "DIY = doing it yourself" to discover the possibilities lying within it. I wonder what kind of exhibition it will be? I'm looking forward to seeing for myself what kind of works are exhibited, the thinking behind them, and how that thinking takes form.



つくるよろこび 生きるためのDIY

Pleasure in Making: The Creative Spirit of DIY for Living

会期

2025年7月24日(木)～10月8日(水)

展覧会公式サイト

<https://www.tobikan.jp/diy>

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

2025年6月10日(火)～7月2日(水)の間、東京都美術館ギャラリーA・B・Cを会場に、毎年恒例の展覧会「都美セクション グループ展」を開催いたします。2012年に始まり今回で14回目となる本展。公募と審査を経て選ばれた3つのグループが、それぞれ異なるテーマのもと、約10か月かけて作り上げた展覧会にご注目ください。

From June 10 (Tue) to July 2 (Wed) 2025, the Tokyo Metropolitan Art Museum will hold its annual "Group Show of Contemporary Artists" in Galleries A, B, C. For this show, the 14th of the series launched in 2012, three artist groups selected through a juried process will present exhibitions they have spent some 10 months creating, each under a different theme.

表現の原点に触れるグループ展

Group exhibitions taking viewers to the source of creation

ギャラリーAでは、4名の作家とアーカイヴ研究者の平諭一郎からなるグループ「ケカラハ」が、「**藝に触れていく**」を実施します。岩井優は清掃で集めた「塵」に、宇多村英恵は生と死の境界に、松尾孝之は現代社会の中で不要とされてきた・いる物事に着目し、小瀬村真美は、近代洋画のリサーチを通して日本人の土着的感覚を浮上させることを試みます。日常(=ケ)を見つめ直し、古来より、日々の生活の中で「穢れ(けがれ)」とされ忌避されてきたもの、時代の変

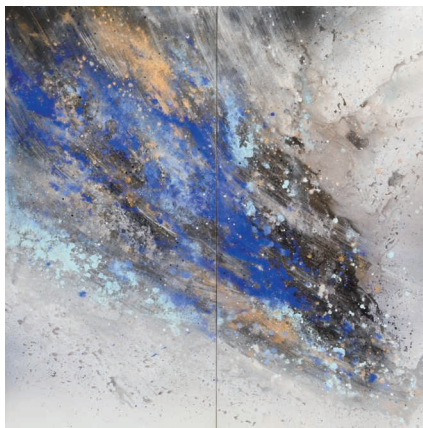
容の中で排除され、価値をはく奪されてきたものへと意識を向ける本展は、私たちの内面に無意識に形づくられた「規範」というものを問い直していく場ともなるでしょう。

ギャラリーBでは、日本画の技法を基礎に置く3名の作家にデザイナーの柏倉風馬が加わったグループ「ビッグ・ネイチャー・ペインティングス」による「**感性が自然に擬態する**」が開催されます。東日本大震災で自然の驚異を目の当たりにしたことをきっかけに、水や風と向き合い描き



ギャラリーA

小瀬村真美
《静物画 - 群馬県桐生市
旧うめ枡》シリーズより
2024年(参考作品)
Mami Kosemura,
*Modern Japanese Still Life -
Former Umemasu,
Kiryu-shi, Gunma, 2024*
(Reference work)



ギャラリーB

佐藤健太郎《風ノ形象XI》

2024年（参考作品）

Kentaro Sato, *Shape of Wind XI*, 2024

(Reference work)



ギャラリーC

さめしまことえ《にぎい、こん!》

2021年（参考作品）撮影：リアライズ

Kotoe Sameshima, *NIGI KON!*, 2021

(Reference work)

続けている佐藤健太郎、まさに自然の中に身を投じ、直に自然と交わりながらその姿を描く土田翔、そして土や砂利などを素材とした作品制作を通し、自然と自己との垣根を再考する安田萌音。それぞれのやり方で自然との一体化を図ろうとするかのような三者の作品を通し、多様な表情をもつ「自然」と出会う機会となるでしょう。

ギャラリーCで実施されるのは、キュレーター
の西田祥子と作家の工藤春香を中心に結成された「パブリック・ファミリー展実行委員会」による展覧会「**パブリック・ファミリー**」です。「公的」な制度によって規定されているものであると同時に、「私的」なものとして公とは切り離して語られることの多い「家族」をテーマとする本展。工藤のほか、参加作家である金川辰吾、坂本夏海、佐々瞬、さめしまことえは、自らの体験や生活する土地などと向き合いながら、人と人との多様な関係性を照らし出すことを通し、「家族」というものの在り方、また、その中で私たちが背負ってきた役割や規範について、さまざまな側

面から再考をうながしていきます。

作家たちが自ら企画・運営に深く関与して作られる「都美セレクトション グループ展」の各展覧会は、そのテーマや目的が、各参加作家たちの創造の原点とダイレクトに結びついていることが大きな特色となっています。今回開催される3展もまた、作家たちの切実かつ誠実な思いによって届けられるものです。どうぞご期待ください。

（東京都美術館 学芸員 大内曜）

From June 10 (Tue) to July 2 (Wed) 2025, "Group Show of Contemporary Artists 2025" will be held in Galleries A, B, C at the Tokyo Metropolitan Art Museum. In Gallery A, "Quekaraha" consisting of four artists and one archivist researcher will hold "Touching Qe." In Gallery B, the "BIG NATURE PAINTINGS" group of three artists working based on Nihonga technique and a designer will hold "Creating as the Mimicry of Nature." Finally, in Gallery C, the "Public Family Project Team" formed of five contemporary artists and a curator will hold the exhibition "Public Family." Exhibitions of the annual "Group Show of Contemporary Artists" are shaped by the artists' close involvement in their planning and operation. Each group's exhibition theme and objectives are sourced from its members' creative origins. This time, as well, three exhibitions inspired by the sincere and earnest thoughts of their artists will unfold in the galleries. We invite you to immerse yourself in their vibrant worlds.

(OUCHIHIKARU, Curator)

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は、2024年4月から配置された「社会共生担当」が行うアクセシビリティ向上のための環境整備について紹介します。

The Museum offers Art and Communication Project designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. As of April 2024, the Museum has engaged a "Social Inclusion Coordinator." This time, we look at environmental preparation in support of the coordinator's work of increasing accessibility and inclusiveness for museum visitors.

東京都美術館の アクセシビリティ向上のために

In order to increase visitor accessibility at the Museum

2024年4月より、当館に社会共生担当専任職員が配置されました。クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとも連携し、当館で進めている取り組みの一例をご紹介します。

From April 2024, a full-time staff member in charge of social inclusion has been deployed at the Museum. Here, we introduce the initiatives the Museum is promoting in linkage with Creative Well-being Tokyo.

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとは？

What is Creative Well-being Tokyo?

東京都とアーツカウンシル東京が主催する、乳幼児から高齢者まで、障害のある人もない人も、そして海外にルーツをもつ人たちも、だれもが文化施設やアートプログラムと出会い、参加しやすいように文化芸術へのアクセシビリティ向上に取り組むプロジェクト。

<https://creativewell.rekibun.or.jp/>

Sponsored by the Tokyo Metropolitan Government and Arts Council Tokyo,

Creative Well-being Tokyo seeks to increase accessibility to arts and culture so that everyone—people of all ages from infants to the elderly, people with and without disabilities, and people with overseas roots—can easily encounter and participate in cultural facilities and art programs.

合理的配慮を学ぶ
研修の様子

Scenes of training in
"reasonable
accommodation"



すべての人に開かれた 「アートへの入口」のために

To be a "doorway to art" open to all

東京都歴史文化財団が管理運営する文化施設に、芸術文化へのアクセシビリティ向上のための環境整備を設計・推進・統括する社会共生担当専任職員が2024年4月より新たに配置されました。当館にも配置され、さらなるアクセシビリティ向上のための取り組みを始めています。

まずは来館者をお迎えするスタッフの意識を揃えるため、職員だけでなく、警備や展示室監視、ミュージアムショップやレストランといった東京都美術館に勤務するスタッフを対象に合理的配慮を学ぶ研修を実施しました。合理的配慮とは個別のニーズに応じて、その人の特性や状況に合わせて調整したり変更したりする対応のことを指します。2021年に障害者差別解消法^{*1}の改正により行政機関等に義務化された後、2024年4月1日からは民間事業者にも義務化されました。研修では、スタッフ同士が意見交換をする時間も設けました。参加したスタッフからは「セクションごとにバラバラだった知識や認識を統合し確認する良い機会になった」「直面した時に慌てず対応できるようにしたい」といった声が寄せられました。

また、聴こえない・聴こえにくい方のための情



とびらプロジェクト オープン・レクチャーでの手話通訳 (右端)
Sign language interpretation at a Tobira Project open lecture (far right)

報アクセシビリティ提供の一環として、2023年度よりインフォメーション(中央棟LB階)には土・日曜日に手話通訳を配していますが、2024年度からは当館主催の展覧会出品作家による講演会やギャラリートークなどには、手話通訳を配したり日本語字幕の表示をしています。手話による施設案内動画はすでに公開されていますが、当館の建築の魅力を、とびらプロジェクト*2で活動するアート・コミュニケーター「とびラー」ならではの視点から手話で伝える動画も制作しました。こちらは近日公開予定です。

さらに、見えない・見えにくい方への対応として、触地図の運用がインフォメーションで始まりしました。館内の配置を触ってご確認いただけます。2024年度から活動するとびラーとして全盲の方を迎えた際にも大いに役立ちました。

また、講堂前のレリーフ*3の触察模型を作成し、2025年度より運用を始める予定です。特別展の展示作品の一部についても触図を作成し「障害のある方のための特別鑑賞会」などでご案内するなど、見える方も見えない方も一緒に鑑賞できる環境を整え始めています。



触地図で館内を確認するとびラーたち

“Tobira” (art communicators) confirming museum layout using a tactile map

あらゆる方が何のためらいもなく来館できる美術館となることを目指し、これからも取り組みを拡げていきます。

(東京都美術館 社会共生担当 工藤阿貴)



「障害のある方のための特別鑑賞会」にてアート・コミュニケーターと一緒に触図をさわって鑑賞する様子 東京都美術館「田中一村展 奄美の光 魂の絵画」(2024年)

Touching tactile art images with an art communicator on the “Special Day for People with Disabilities” (“Tanaka Isson: Light and Soul,” Tokyo Metropolitan Art Museum, 2024)

*1 内閣府 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律
https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law_h25-65.html

*2 東京都美術館と東京藝術大学と市民が協働し、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクト
<https://tobira-project.info/>

*3 《舞踏》(ジョゼフ=アントワーン・ベルナル、1925/1975)



施設案内動画
QRコード
Facility guide
video QR code

A “full-time Social Inclusion Coordinator” has been deployed at the Tokyo Metropolitan Art Museum. Diverse efforts are being made to create a museum that everyone, whether having disabilities or not, can visit without hesitation. We first of all conducted training in “reasonable accommodation” not only for museum staff but staff employed as security personnel, gallery attendants, and museum shop and restaurant personnel as well. To accommodate people who are deaf or have hearing loss, sign language interpreters are assigned to the Information counter every Saturday and Sunday. In addition, programs such as lectures are accompanied by sign language interpreters. Introductory videos using sign language will also be released in sequence.

To assist people who are blind or have low vision, tactile maps have been created. Museum layout can be understood by touching the map. Tactile models of sculptures in the museum are also being produced, and will be available for people with and without visual impairments to enjoy together from spring 2025. Hereafter, the Tokyo Metropolitan Art Museum will continue to expand its efforts so that people can easily visit the Museum regardless of whether or not they have disabilities.

(KUDO Aki, Staff of Social Inclusion, Learning and Public Projects)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約260団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 260 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

Sharing the joy of creation in the Studio and Auditorium

つくる喜びを分かち合う スタジオと講堂の現場から



2024年10月スタジオ利用より(「人物デッサン・作品講評」女流画家協会)

Scenes of Studio in use in October 2024 (Women Artists Association's "Figure Sketching & Artwork Critique")

東京都美術館には、芸術文化の講座や美術制作活動の場としてご利用いただけるスタジオと講堂の施設があります。

日頃ご利用いただいている様子をご紹介します。

2024年10月、交流棟2階にあるスタジオでは、女流画家協会の研究部による「人物デッサン・作品講評」が開かれていました。この研究部は、作品制作の研鑽を目的として開設され55年の歴史があるそうです。この日の参加者は35名。30年間継続している方から今年初めて参加した方まで幅広く「モデルデッサンは描写力が鍛えられる」、「(他の参加者がいることで)緊張感が生まれ、デッサンに集中できる」、25年の経験者でも「基礎力キープのため」など、そ

れぞれに明確な目的を持って参加されているだけに、熱気のある場となりました。描きあげた何枚ものデッサンに、着色している方もみられます。同時開催で行われるエスキース(作品下絵)の講評は経験豊富な講師陣が多く人気とのこと。「講師が毎月変わるので多角的なアドバイスがもらえる」、「展覧会出品の後押しになる」など、経験年数にかかわらずどなたでも参加できる雰囲気の中、真剣に制作に取り組む皆様の姿が印象的でした。

また、別の日の交流棟ロビー階の講堂では、日本書院展授賞式の準備が進められていました。一般と学生の部の受賞者とご家族の皆様、壇上には審査委員の先生方が見守っています。授賞式が始ま



2024年10月講堂利用より
 (「第65回記念 日本書鏡院
 展 授賞式」日本書鏡院)

Scenes of Auditorium in use
 in October 2024
 (Nihonshokyojin's "65th
 Anniversary Nihonshokyojin
 Awards Ceremony")

ると会場は熱気に包まれ、喜びを共有する特別な時間が流れていました。受賞者の一人からは「(大学)受験勉強と同時に書を続けてきた。目標の賞を受賞できて嬉しい」との喜びの声がありました。東京都美術館の旧館時代から、この展覧会に出品されているという審査委員の方からは「かつて私も同じ賞を受賞した。今は審査する側になったが、書に対する気持ちは変わらない」とのお話もあり、晴れやかな表情で思いを語るお二人の様子から、文化が継承されていく姿を間近に見たように感じました。

当館では、作品発表の場として多くの展覧会が開催されていますが、スタジオや講堂も、様々な美術活動の実施と交流の場となっています。今回紹介した活動のほかにも、講演会やワークショップなど、一般の方が参加可能な行事もありますので、公募展や学校教育展にお越しの際には各団体にお問い合わせください。また芸術文化に関する事業の実施会場として、必要な要件を満たす団体のご利用申請を受け付けております。詳しくは当館ウェブサイトの「施設貸出」ページをご覧ください。

(東京都美術館 交流係 中田歩)

Here, we offer examples of how the Studio and Auditorium can be used as places for arts and culture courses and art production activities.

In the Studio, a study group of the Women Artists Association was held. There were 35 participants on this day, people gathering with clear objectives in mind: to sharpen their drawing skills, reinforce basic skills, and so on. To see them engaging intently in production was impressive. The sketching critique offered at the same time is popular as a chance to receive multifaceted advice from experienced instructors.

In the auditorium, the Nihonshokyojin Award Ceremony

was held. One award winner expressed his joy by saying, "I'm happy to have received the award I aimed for." A jury member who had previously received the same award also commented that "My feelings about calligraphy haven't changed even now that I'm on the jury." Their radiant faces as they expressed their thoughts made listeners feel a sense of cultural connectivity.

There are also lectures, workshops, and other events the general public can participate in, so please contact the groups involved in the Public Entry Exhibitions and School Education Exhibitions.

(NAKADA Ayumi, Creative Connections Section)

美術情報室・
アーカイブズ

美術情報室は、図書・図録・雑誌などを閲覧できるライブラリー。
アーカイブズでは、館の歩みに関する資料を収集・整理・保存・公開しています。

A library open for perusal of reference books, catalogues, and magazines.
The Archives collect, preserve, and display materials documenting the museum's progress.

美術情報室からおすすめ図書のご紹介です

Library and Archives Recommended Book

「絵画をみる、絵画をなおす 保存修復の世界」

田口かおり 著／偕成社 刊／2024年

*Looking at Paintings, Restoring Paintings: The World of
Art Restoration and Repair*

TAGUCHI Kaori (author) / KAISEI-SHA Publishing Co., Ltd.
(publisher) / 2024



美術作品に関わる重要な仕事として作品の
保存修復があります。その保存修復に携わる修

復家の田口かおりさんによる著書です。ご自身が修復家になるまでの道のりから始まり、修復家がどのような仕事をしているのかを、著名な作品の事例やご自身の経験を交えて具体的に、そして子どもでもわかるように平易に語ってくれます。田口さんは、修復家にとって大事なものは、使われている素材や技法、制作の過程や以前の修復の痕跡を調べることであり、そこから、作者が作品に込めた思いや作品にとって何が重要なのかを考えることだと言います。その結果、ときには修復をしないという選択をすることもあるそうです。「作品こそが修復の方法をきめるのであり、修復が作品の命を、命運を、きめるものであってはいけません」という言葉には、修復家として作品に真摯に向き合いつづけた重みを感じられます。美術館で作品を見ているだけではわからない、保存修復の仕事の奥深さを知れるまたとない一冊です。

(東京都美術館 学芸員 高城靖之)

Art conservation and restoration is a profession of strong importance to art. This is a book by TAGUCHI Kaori, a conservator employed in art conservation and restoration. After recounting her own path to becoming a conservator, she explains the work a conservator does in a simple, concrete way that even children can understand, while offering examples of famous works and her own experiences. According to Taguchi, a conservator must first examine the materials and techniques used in producing a work, as well as traces of previous restorations. On that basis, the conservator ponders the artist's thoughts behind the artwork

and factors important to the work. As a result of their investigation, conservators may even choose not to restore a work. "The artwork itself decides the method of restoration it needs. The restoration should never determine the life of the work or its fate," Taguchi says. Her remark conveys the weight of her sincere commitment to her work as a conservator.

This unique book enables us to know the depth and complexity of conservation and restoration work, something hard to grasp simply by viewing the works in the museum.

(TAKASHIRO Yasuyuki, Curator)

TOPICS

*On days when
the Museum is closed*

東京都美術館の休館日

建物や景観等のコンディション維持に 努め、みなさまをお迎えしています

We strive to maintain the building and its landscape for visitors



JR上野駅公園改札を出て正面に見える上野動物園から右横に目を向けるとレンガ色の外壁の東京都美術館が見えてきます。完全に閉じられた正門には赤色文字の「休館日 Closed today」の看板が掲出されています。そう、今日は全館休館日です。開館日は多くの来館者をお迎えする特別な日ですが、休館日も東京都美術館にとって重要で特別な1日です。

正門越しには早朝から、ぶお〜ん、ぶお〜んと、勢いよく機械音が聞こえてきます。芝や植え込みの木を刈る音です。エスプラナードと中庭では、エスカレーターやエレベーターの点検も始まり、館内に24時間常駐する設備管理員による、各種設備点検やメンテナンスも早朝から夜まで盛りだくさんでスケジュールがびっしり埋まっています。

メンテナンスの他には、全スタッフ参加による防災訓練や接遇研修、ミュージアムショップ

(ロビー階)の様様替えやレストラン・カフェの新メニュー開発、ファッション誌やテレビドラマのロケーション撮影の受け入れなどが行われることもあります。

日々のメンテナンスに加え、全館休館日に定期的に組まれたメンテナンスにより、美術館の建物や設備、景観等のコンディション維持に努め、開館日にみなさまをお迎えしています。

(東京都美術館 管理係 進藤美恵子)

The days the Museum is open are special days when we welcome many visitors, but our days closed are also special, important days. From early in the morning, the air is filled with sounds of lawns and shrubbery being trimmed. A schedule of tasks such as inspecting escalators and elevators consumes an entire day. In addition to maintenance tasks, we also conduct disaster drills and hospitality training with the participation of all staff. The museum shop's layout is changed, new menu items are developed for our restaurants and cafe, and location shooting for fashion magazines and TV dramas is accepted. In addition to day-to-day maintenance, we strive to maintain the museum's building, facilities, and scenery through regular maintenance scheduled on days when the entire museum is closed.

(SHINDO Mieko, Management Section)

道明 代表取締役社長

道明 葵一郎さん

DOMYO Kichiro
(president of Domyo)

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界限。今回は組紐の魅力をさまざまな形で発信している道明の10代目社長がまちの魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the mood of Tokyo's old downtown quarter. This time, the 10th-generation president of Domyo, a store selling hand-crafted *kumihimo* braided cords in a variety of forms, introduces Ueno's attractive features.



道明上野本店では、自社職人によって手染め・手組みされた、豊富なカラーバリエーションの帯締が並ぶ。10代目社長・道明葵一郎さんが着用しているネクタイは、2015年に立ち上げた洋装ブランド「DOMYO」の一点もの

Arrayed at the Domyo Ueno Main Store: *kumihimo* in many color variations, hand-dyed and braided by the company's own craftspeople. The tie worn by 10th-generation president DOMYO Kichiro is a unique item from the Western-style clothing brand "DOMYO" launched in 2015

不忍池のほとりで守り続けてきた伝統工芸 上野にお越しの際は“和の文化”にもふれてみませんか？

Traditional crafts, continually preserved at the edge of Shinobazu Pond.
On your visit to Ueno, why don't you try experiencing Japanese culture?

色とりどりに染められた絹糸を交差させ、組み上げてつくる「組紐」。今では着物の帯を固定するために巻く帯締として用いることが多い組紐ですが、飛鳥時代から宮廷の装束、鎧の紐、刀の下緒と、時代の移り変わりとともにさまざまな用途で使われてきた、日本の伝統工芸品です。

道明は上野・池之端の地で1652年、糸商として創業し、組紐を手掛けるようになりました。創業以来、糸染めから組み上げるまでのすべてを職人の手仕事で行っているため、機械生産の組紐にはない伸縮性と独特の手触りがあります。同じ色系で同じ組み方をして指先の

力のかけ具合などが職人によって違うため、質感や風合いが微妙に異なり、すべてが一点ものといっても過言ではありません。

お客様は着物にこだわりのある方が多いのですが、時折、嘶家さんや女優さんから「この帯に合う帯締を」「こういう色味で羽織紐をつくってほしい」とオーダーメイドでご注文いただくことも。「願った通りの色味だ」と喜んでいただけた時は嬉しいですね。

上野本店は1階が店舗、2階から上は工房となっており、職人が絹糸の染色・成形、組みとといった作業を行っています。工房では、職人の

仕事を見学したり、実際に自分で糸を組んでオリジナルのアクセサリーをつくる体験ツアーの受け入れもしています。

工房見学もそうですが、ここ最近では、外国人の方が店に立ち寄られることも多くなりました。帯締めを何に使うのかご存知でない方がほとんどですが、それでも美しさは万国共通のようで、色彩の豊かさやデザイン性の高さに感心していただきます。

そういった外国人の方はもちろん、日本人にも組紐や上野に息づく伝統文化にもっと親んでいただくために地域の方と一緒に始めたのが、“不忍池界隈の魅力再発見”をスローガンとした「しのばず和めぐり」という活動です。不忍池の周辺には、大正時代から続く日本画材店、老舗の呉服店、つけ飾の店など、長い歴史をもつ伝統的な和の店が立ち並んでいます。店先をのぞいてみるだけでも楽しめますし、いずれはこの一帯でさまざまな工芸技術を見たり、歴史のレクチャーを受けたりできるツアーも組んでいきたいと考えています。

上野というのは、稀有なまち。美術館などが集まる文化的エリア、アメ横を中心に活気あふれる買い物エリア、自然豊かな上野公園、そして下町情緒あふれる街並みが、いずれも駅から徒歩圏内に広がっている。山手線の他の駅でこんなところはありませんよね。上野に来られる方には、それぞれお目当てのエリアや楽しみ方があり、十分このまちを満喫されていることと思

Kumihimo braided cord, made by interlacing colorful silk threads, is an ancient Japanese craft. Although now mainly used for *obijime* (the cord securing an obi in place on a kimono), it has been employed in various ways since the Asuka period. At Domyo, craftsmen have undertaken the entire braided cord-making process by hand since our founding. Visitors to our Ueno Main Store can watch craftsmen dye and bundle the silk threads and braid the cords, and we also offer tours for them to actually braid cords and make accessories themselves.

To familiarize people with *kumihimo* and the traditional culture still living in Ueno, we started an activity with local people called the “Shinobazu Wa Tour.” The area around Shinobazu Pond is lined

いますが、新たな上野の魅力として、ぜひ和の要素も加えていただきたい。これまでは、例えば美術館でアートにふれ、アメ横でショッピングを楽しみ、甘味処で舌鼓を打つ…といったことが上野の定番の楽しみ方だったと思います。そこで私どもが提案したいのは、甘味処などで一息ついた後に、さらに不忍池周辺で“和の店めぐり”をしていただくこと。伝統文化にふれるゆったりとした時間も新たな上野の楽しみ方に加えていただければ嬉しい限りです。



糸染めは組紐作りの最初の工程。職人が経験と勘を頼りに、染料の配合と濃度を調整しながら絹糸を染めあげていく。Thread dyeing is the first stage in the process of braid making. Craftsmen rely on their experience and intuition to dye silk threads while adjusting the composition and concentration of dyes.



熟練した職人の手で組み上げられていく組紐
Braided cord is hand-crafted by skillful craftsmen

with traditional Japanese shops with long histories, and it's fun just to peek inside them.

As a district, Ueno is unusual because of its cultural areas, shopping areas, and quaint townscapes all within walking distance of the station. Everybody has their favorite places and ways of enjoying themselves in Ueno, but I encourage you to add a new element to your visit: the fascination of traditional Japan. Until now, seeing art at museums, going shopping in Ameyoko, and satisfying your taste buds at a sweet shop have been the standard ways of enjoying Ueno. Please add a tour of “traditional Japanese shops” for an experience of traditional culture to your list. We would be immensely delighted.

◀◀ あの日・あの時 Playback! TOBI ▶▶

※東京都美術館は2026年に開館100周年を迎えます。

東京都美術館の正門で皆さんをお迎えするこの球体作品は、彫刻家の井上武吉による《my sky hole 85-2 光と影》です。このステンレス製の球体が映し出す不思議な世界に見入ったことのある方も多いのではないのでしょうか。本作品は、新館開館10周年特別展「my sky hole—迷路 井上武吉新作展」の開催に先立って当館が井上に制作を依頼し、ちょうど40年前の1985年3月に設置されました。井上は本作品の設計をした1984年12月8日正午の日光をもとに、その時の光の入射角に合わせて球体に穴をうがち、球体の影を鉄の台座で表現したといいます。この写真は、重量物を持ち上げるクレーンを使用し、表面を保護した直径2m50cmの球体を細心の注意を払って台に載せる作業を写しています。

(東京都美術館 学芸員 中江花葉)



《my sky hole 85-2
光と影》設置風景
1985年

齊藤泰嘉氏撮影

*my sky hole 85-2:
light and shadow
installation scene (1985)*
SAITO Yasuyoshi photo

This spherical artwork welcoming visitors at the main gate of the Tokyo Metropolitan Art Museum is *my sky hole 85-2: light and shadow* by sculptor INOUE Bukichi. The work was requested of the artist ahead of the New Museum Building's 10th anniversary special exhibition "Bukichi Inoue: my sky hole 1985" and installed 40 years ago in March 1985. This photograph shows the use of a heavy-duty crane to place the 2.5m diameter sphere, its surface carefully protected, on a platform with extreme caution.

(NAKAE Kana, Curator)

東京都美術館 ニュース No.480

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2025年3月31日

発行 東京都美術館(公益財団法人東京都歴史文化財団)

企画・編集 東京都美術館 広報担当

デザイン 株式会社ファントムグラフィックス

翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ

印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

*最新情報は公式サイトで
ご確認ください



*バックナンバーは
こちら



東京都美術館

〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

Tel 03-3823-6921

Fax 03-3823-6920

公式サイト

<https://www.tobikan.jp>

X (旧Twitter)

[tobikan_jp](https://twitter.com/tobikan_jp) [tobikan_en](https://twitter.com/tobikan_en)

Facebook

[TokyoMetropolitanArtMuseum](https://www.facebook.com/TokyoMetropolitanArtMuseum)

Instagram

[tokyometropolitanartmuseum](https://www.instagram.com/tokyometropolitanartmuseum)

YouTube

[@tokyometropolitanartmuseum7280](https://www.youtube.com/channel/UCk00000000000000000000)

表紙の
作品

瀬尾夏美 《とおくにづく》2015年

アクリル/カンヴァス 作家蔵

Nastumi Seo, *Continuity*, 2015,

Acrylic on canvas, Collection of the artist

